

# 旧約聖書における「福音」とは ～イザヤ書から考える～

関西聖書神学校  
鎌野直人

2016/5/16

日本福音主義神学会中部部会研究会議にて

## I. はじめに

近年、聖書が語る「福音」についての再検討が一般書のレベルで行われている<sup>1</sup>。「福音」とは何か。「福音」はなにを生み出すのか。それぞれの立場から、さまざまな声が聞こえてくる。特に、2016年9月に神戸でもたれる第6回日本伝道会議では、『再生へのRe-VISION～福音、世界、可能性～』というテーマが掲げられており、「福音とはなにかを『見・直す』」ことが日本の教会において重要であることが強調されているからこそ、この機会に、『福音』を見直すことは必要だろう<sup>2</sup>。

本稿では、旧約聖書学の立場から、「福音とはなにか」という問いかけについて考える。本来ならば、旧約聖書全体にわたっての検討が必要であるのだが、時間の関係で、イザヤ書に限定した小論とする。なお、聖書の日本語訳は、原則として新改訳聖書第三版を用いるが、必要に応じて一部を私訳としている（その旨はそれぞれ明記している）。

## II. 「福音」

### 1. 「福音」と訳されるヘブル語רָשָׁע

「福音」と日本語に訳されるギリシア語εὐαγγέλιονは、旧約聖書の古ギリシア語訳（一般に七十人訳と呼ばれている）では、ヘブル語のרָשָׁעの訳語として用いられている。さらに、「福音を伝える」と訳されるギリシア語εὐαγγελίζομαιは、ヘブル語のרָשָׁע（一般的にPiel語幹）の訳語として古ギリシア語訳では用いられている。両者とも登場する2サムエル4:10を見てみよう。両者が見事に対応していることがわかるだろう。

- 
1. たとえば、Scot McKnight, The King Jesus Gospel: The Original Good News Revisited (Grand Rapids: Zondervan, 2011) (邦訳：スコット・マクナイト『福音の再発見：なぜ『救われた』人たちが教会をさってしまうのか』中村佐知訳、キリスト新聞社、2013年)、Tom Wright, Simply Good News: Why the Gospel Is News and What Makes it Good (London: SPCK, 2015)。
  2. JEAの神学委員会が中心となって「福音」について考えるプロジェクトを計画中である。

כִּי הַמַּגִּיד לִי לְאֹמֶר הַנְּהַמַּת שָׂאוּל  
וְהוֹאֵהָ כַּמְבַּשֵּׁר בְּעֵינָיו  
וְאַחֲזָה בּוֹ וְאַהֲרָגְהוּ בְּצַקְלָג אֲשֶׁר לְתַת־יָלוֹ בְּשָׂרָה:

ὅτι ὁ ἀπαγγείλας μοι ὅτι τέθνηκεν Σαουλ \_ καὶ αὐτὸς ἦν ὡς εὐαγγελιζόμενος  
ἐνώπιόν μου \_ καὶ κατέσχον αὐτὸν καὶ ἀπέκτεινα ἐν Σεκελακ, ὧ ἔδει με δοῦναι  
εὐαγγέλια:

かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました』と告げて、自分自身では、良い知らせを  
もたらしたつもりでいた者を、私は捕らえて、ツイケラグで殺した。それが、その良い知らせ  
の報いであった。

この対応からわかるように、**בְּשָׂרָה**は「知らせそのもの」を指し、**בַּשֵּׁר**のPiel語幹は「知らせを伝  
える」という動作を指している。

Dictionary of Classical Hebrewによると、**בַּשֵּׁר**にはPiel語幹の動詞として"annouce (news)" (知らせを  
告げる)、分詞として"messenger" (知らせを告げる者)、Hithpael語幹の動詞として"receive  
news" (知らせを受ける) という意味がある<sup>3</sup>。さらに、**בְּשָׂרָה**には"news" (知らせ) という意味があ  
る<sup>4</sup>。それでは、**בַּשֵּׁר**が意味する「知らせ」には、「知らせ」以上のニュアンスはあるのか。

なお、**בַּשֵּׁר**は、Piel語幹では23回、Hithpael語幹では1回、旧約聖書では用いられている。さらに、  
名詞の**בְּשָׂרָה**としては6回、登場する。以下では、これらの用例をすべて検討して、この語の持つ  
ニュアンスをあぶり出す。

## 2. サムエル記ならびに列王記から

まず、サムエル記ならびに列王記に登場する用例を検討しておこう。

1サムエル記4:17の「知らせをもって来た者」(**הַמְבַּשֵּׁר**)は、戦場から帰還し、そこでの戦いの  
結果を伝える人である。イスラエルに属す彼は、自軍の敗北の知らせを伝えた(4:11-22)。

1サムエル記31:9では、ギルボア山での戦いにおいて勝利したペリシテ側の行動が記されてい  
る(1歴代誌10:9も同様の内容)。サウルと彼の三人の息子の遺体を見出し(1サムエル31:8)、  
その首を切り、その武器をはぎ取ったあと、ペリシテの偶像の宮と民とに、イスラエルとの戦いにお  
けるペリシテの勝利の知らせを「告げ知らせ」(**לְבַשֵּׁר**)ている(31:9)。

同じ戦いのイスラエル側の応答が2サムエル記1:20に記されている。サウルとヨナタンの死を悼む  
歌(1:19-27)の一節で、戦いにおいて勇士が倒れたことを「ガテに告げるな」という行に並行し  
て「アシュケロンのちまたに告げ知らせるな」(**אַל-תְּבַשֵּׁר**)という行が置かれている(1:20)。  
ここで「告げ知らせる」ことが禁じられているのは、ペリシテとイスラエルの戦いにおけるペリシテ

3. David J. A. Clines, ed., The Dictionary of Classical Hebrew, vol. 2 (Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 1995) 278.

4. Op. cit., 275.

側の勝利の知らせである。

さらに、ダビデは同じ戦いを別の箇所でも思い起こしている。知らせを伝える者は、「良い知らせをもたらした」(מְבַשֵּׂר)と考へて、サウロの死をダビデに伝えた。ところが、「良い知らせ」(בְּשׂוּרָה)を告げ知らせたと自身で考へていた人に与えられたのは、褒美ではなく、自身の死であった(4:10)。この箇所でも、「知らせ」は戦いの結末についての知らせである。しかし、それを勝利の知らせとするか(「よい知らせ」)、敗北の知らせを取るか(「悪い知らせ」)は、聞き手次第である。その錯誤が起こったために、知らせを伝える者は自らの死をその報復として受けた。

2サムエル記18章には、Piel語幹の動詞が四回(18:19, 20 [x2], 26)、Hithpael動詞が一回(18:31)、名詞が四回(18:20, 22, 25, 27)登場する。ダビデの軍とアブシャロムの軍との戦いにおいて、ダビデの軍が優勢に戦いを進めた(18:7)。そして、ヨアブとその道具持ちの若者たちがアブシャロムを殺したため(18:14-15)、アブシャロム側のイスラエルは、みな敗走していった(18:17)。そこで、アヒマアツは「知らせを(ダビデに)伝えたい」(וְאֵבְשָׂרָהּ)と願う(18:19)。これは、「主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされた」という内容の知らせであり、戦いの結末についての知らせである。しかし、王の息子であるアブシャロムの死の知らせとこの知らせは切り離せないからこそ、このことをアヒマアツが伝えるべきではないと考へたヨアブは(18:20)、クシュ人をダビデに送る(18:21)。しかし、アヒマアツは自分を送るようにとヨアブにしつこく願ったので、彼をもダビデのところに送ることとなった(18:22-23)。

知らせを伝える者がダビデのところに到着した。最初に知らせを伝える者がひとり来たのを見て、「ただひとりなら、吉報(בְּשׂוּרָה)だろう」(18:25)と王は語っている。「戦いにおける自軍の勝利の知らせ」であって、敗北の知らせではない、と王は期待している。二人目の到来(18:26)のさいも、同じように、「よい知らせを伝える者(מְבַשֵּׂר)」であると呼ばれている。さらに、最初に到着したのアヒマアツであることがわかると、王は「良い男(אִישׁ-טוֹב)」が伝える「良い知らせ(בְּשׂוּרָה טוֹבָה)」に違いない、と語る(18:27)。形容詞「良い」が追加されて、知らせの「良さ」が強調されており、「戦いにおける自軍の勝利の知らせ」という意味で、この語がここで用いられている考へられる。クシュ人は、「わが主、王が知らせを受け取るように(וְיִתְבַּשֵּׂר)」と語っている(18:31)。ここではHithpael語幹の動詞による受動態が用いられている。語り手が伝えようとしているのは、戦いにおける自軍の勝利である。

1列王記1章にもこの語が用いられている。ダビデの死が近い中、アドニヤが次期の王となろうと画策しているとき(1:5-10)、ナタンはバテ・シェバにアドニヤが王となった、と告げ(1:11)、ダビデにそのことを告げるように求め(1:13)、彼女は実際にそのようにダビデに語った(1:18)<sup>5</sup>。さらにナタンも同様の報告をダビデに行っている(1:25)。これらの知らせを受けて、ダビデはソロモンを王とすることを宣言し(1:29-30)、祭司ツァドクに命じてギホンでソロモンに油を注がせた(1:39)。祭司エブヤタルの子であるヨナタンはこのことを聞いて、ソロモンが王となったという

5. 注意深くテキストを読むとわかることではあるが、アドニヤはいけにえを献げ、王の子たちを招き、王の家来であるユダのすべての人々を招いたに過ぎない(1列王記1:9)。アドニヤには確かに王になろうという意志はあったが(1:5でのאֲנִי אֶמְלֹךְは未完了形)、「王になった」と宣言はしてない(1:11, 13, 18では、動詞מָלַךְの完了形が用いられている)。さらに、ナタンは、人々が「アドニヤ王。ばんざい」(יְחִי הַמֶּלֶךְ אֲדֹנִיָּהוּ)と告げたと言っているが(1:25)、1:9を読む限りにおいて、そのようなことは一切書かれてはいない。テキストに書かれていないことは一切語られていない、と考へる必要はないが、注意深いテキストの読みは、1:11と1:25におけるナタンの報告が正確であることを保証しない。

知らせをアドニヤに伝えた (1:43)。このような状況下で、ヨナタンがアドニヤのところに来た時に、アドニヤは「あなたは『よいこと』を知らせるだろう」(וְטוֹב תְּבַשֵּׂר) と語っている。残念ながら、その知らせ (1:43-48) はアドニヤにとってはよいものではなかった。この箇所のお知らせは、サムエル記に登場したような「戦闘における勝利の知らせ」ではない。その一方で、より比喩的ではあるが、「王位継承という戦い」においてだれが勝利したか、の知らせであると言うことも可能である。つまり、アドニヤが王となることにダビデが同意した、という知らせをアドニヤは期待していたのだろう。

列王記の最後の用例は、2列王記7:9に登場する。アラムの王ベン・ハダデの軍によるサマリヤ包囲が行われ、それとともにひどい飢饉が到来した (6:24-25)。食べ物を求めた四人のツアラアトに冒された男たちは、アラムの陣営に入り、そこがもぬけの殻になっていることを見出す (7:5)。そこに残されていた多くの食べ物を食べ、銀や金や衣服を持ち出した (7:8)。彼らは、このような出来事を経験した日こそ「知らせの日」(יּוֹם-בְּשֹׂרָה) だ、と語り、このことを伝えるべきであると互いに言い合った (7:9)。そして、サマリヤの門衛にこのことを知らせた (7:10)。町の包囲という形でのアラムとイスラエルの争いにおいて、アラムが勝手に敗走し、結果的にイスラエルが勝利したことがここでの「知らせ」である。

このように見ていく時に、動詞**בשר**ならびに名詞**בְּשֹׂרָה**は、「何らかの形の紛争、多くの場合には戦場における戦闘が行われている中での、その勝敗の知らせ」(名詞)とその「知らせを伝えること」(動詞)を表していることがわかる<sup>6</sup>。一般的に、知らせを受けた側の勝利の知らせの場合には、「よい知らせ」と考えられるが、敗北の知らせの場合には「悪い知らせ」となる。この語は、両者どちらの場合でも用いることができる。

### 3. その他の箇所から

動詞**בשר**ならびに名詞**בְּשֹׂרָה**が、サムエル記や列王記と同様のニュアンスで用いられている箇所として、ナホム書1:15 (BH 2:1) がある。ここでの紛争は、「神々」、「彫像や铸像」(1:14)、「よこしまな者」(1:15 [BH 2:1])、「散らす者」(2:1 [BH 2:2])と主との間で行われていたものである<sup>7</sup>。

見よ。知らせを伝える者 (**מְבַשֵּׂר**)、

平和を告げ知らせる者 (**מְשַׁמְעֵי שְׁלוֹם**) の足が山々の上にある。

ユダよ。あなたの祭りを祝い、あなたの誓願を果たせ。

よこしまな者は、もう二度と、あなたの間を通り過ぎないからだ。

彼らはみな、断ち滅ぼされた。(1:15 [BH 2:1]、一部私訳)

6. この点については、M. Eugene Boring, "Gospel, Message," in The New Interpreter's Dictionary of the Bible, vol. 2, edited by Katharine Doob Sakenfeld, et. al. (Nashville: Abingdon Press, 2007) 630; Stephen T. Hague, "**בשר**," in New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis, vol. 1., edited by Willem A. VanGemeren, et. al., (Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1997) 775に同意する。
7. これらの人々がニネベ (ナホム1:1) と深く関わるアッシリアの軍勢であることは明らかだろう。

主が紛争に勝利を取り、その結果、その知らせが伝えられている。主の勝利は紛争の終わりをもたすので、結果的に「平和」(שָׁלוֹם)が生み出される。そこで、平和も同時に告知知らせられる。そして、祝祭と誓願の成就の応答が人々の間に生み出されるのだ。

詩篇に目を移す時、紛争はより個人的なレベルのものもある。

40篇では、「私のいのちを求め、滅ぼす者ども」、「私のわざわいを喜ぶ者ども」(40:14 [BH 40:15])、「私を『あはは』とあざ笑う者ども」(40:15 [BH 40:16])が登場し、詩人は彼らからの助けを求めている(40:13-15, 17 [BH 40:14-16, 18])。そのような文脈の中で、次のように言われている。

私は大きな会衆の中で、義(צְדָקָה)の知らせを告げます(בְּשִׁרְתִּי)。

ご覧ください。私は私のくちびるを押さえません。

【主】よ。あなたをご存じです。(40:9 [BH 40:10]、一部私訳)

ここでの告知知らせる内容は、「あなたの義」(צְדָקָתְךָ)、「あなたの真実とあなたの救い」(יְשׁוּעָתְךָ וְתִשְׁבּוּתְךָ)、「あなたの恵みとあなたのまこと」(חֶסֶדְךָ וְאֱמֻנָתְךָ)である(40:10 [BH 40:11])。ここで使われている語が契約と密接に結びついている語であることからわかるように、詩人の敵の手から詩人を救い出すことによって、詩人と契約を結ばれている主が詩人の敵との争いに勝たれたことが告げられている。ここでの詩人である「私」は、一般人ではない。表題が記しているように、イスラエルの王であるダビデである。ダビデを救い出すための戦いにおける、ダビデ王との契約(2サムエル7章)に基づく、ダビデの敵に対する主の勝利という知らせが、ここでは告げられている。

表題にダビデが登場する68篇では、万軍の王たちとイスラエルの神との戦いが語られている。

主はおことばを賜る。

知らせを告げる女たち(הַמְבַשְׂרוֹת)は大軍をなしている。

大軍の王たちは逃げ去り、また逃げ去る。

そして家に居残っている女が獲物を分ける。(68:11-12 [BH 68:12-13]、一部私訳)

イスラエルの神が戦いへと出陣し、その結果として、雨を注ぐことが告げられている(68:7-10 [BH 68:8-11])。戦いについては当初は、記述されていないが、勝利の獲物を分配する様は描かれている(68:12 [BH 13])。さらに、敵を打ち破る姿(68:21 [BH 68:22])も描かれている。ここで取り上げられているのは、主が敵に対して戦われ、勝利を得られたという内容の知らせである。

96篇には敵の姿は見出されない。

新しい歌を【主】に歌え。全地よ。【主】に歌え。

【主】に歌え。御名をほめたたえよ。

日から日へと、その救い(יְשׁוּעָתְךָ)を告知知らせよ(בְּשִׁרְךָ)。

その栄光を国々の中で語り告げよ。

その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。(96:1-3)

ここで告げ知らせる内容に「その救い」とあることから、何らかの争いにおいて、主が勝利をとられ、だれかを救出したと考えられる(40:10 [BH40:11] 参照)。この「救い」が「その栄光」や「その奇しいわざ」(96:3)と関わりもある。1歴代誌16:23では同じ詩が引用されており、そこではペリシテに対する勝利が示唆されている(1歴代誌14:8-17)。その点からも、詩篇96篇が諸国との争いにおける主の勝利の知らせと関わりがあると考えられることができる。

以上を見ていく時、動詞**רשׁב**ならびに名詞**בְּשׁוֹרָה**は、「何らかの形の紛争、多くの場合には戦場における戦闘が行われている中での、その勝敗の知らせ」(名詞)とその「知らせを伝えること」(動詞)という意味で用いられていることがわかる。もちろん、ここで取り上げられている戦いは、国々との戦いの場合もあるし、主(ならびにイスラエル)と諸国との戦いの場合もある。どちらにせよ、紛争の決着についての知らせがそこで語られている。

ただし、例外として考えられるのは、エレミヤ20:15である。

呪われよ、

私の父に「あなたに男の子が生まれた」と告げ知らせ (**בְּשׁוֹרָה**)、  
彼を大いに喜ばせた人は。(一部私訳)

男の子の出産と紛争における勝利とを結び付けることは困難であり、ここではDictionary of Classical Hebrewの「知らせを告げる」というもつとも単純なニュアンスであると考えるのが妥当であろう。ただし、よく似た内容のヨブ記3:3は、

私の生まれた日は滅びうせよ。

「男の子が胎に宿った」と言った (**אָמַר**) その夜も。(ヨブ3:3)

と動詞**אָמַר**を用いているので、動詞**רשׁב**を用いるのにはそれなりの理由があるのかもしれない。前後の文脈を見ると、ここでのニュアンスを浮かび上がらせる二つの特徴がある。まず、誕生の知らせが「喜び」を生み出している点である。1サムエル記1:20ではペリシテ人の喜びが示唆され、ナホム書1:13 (BH 2:1) では喜びの祝祭を生み出す知らせが伝えられている。後述するイザヤ書52:7-10でも、この知らせのあとには、喜びが生み出される。もう一つは、エレミヤ書20:14-18の嘆きの歌の直前に、主の救いの賛美が置かれている点である。

【主】に向かって歌い、【主】をほめたたえよ。

主が貧しい者のいのちを、悪を行う者どもの手から救い出された (**הַצִּיל**) からだ。(20:13)

賛美を求めることば(「【主】に向かって歌い、【主】をほめたたえよ」と救いに関することばが、直前に置かれている。両者の特徴はともに、詩篇96篇に見出されており、主の特別なわざに対する一般的な対応であると考えられることもできる。以上の二つの特徴から、エレミヤ書20:15では、戦いの勝利の知らせに比することのできる子どもの誕生が、戦いの敗北の知らせとなってしまったという

アイロニーが込められている可能性がある。その場合には、エレミヤ書20:15における動詞**רשׁב**の用例も、これまで見てきたものと同じニュアンスを持つと考えることができる。

## II. イザヤ書における福音

### 1. イザヤ書に見る**רשׁב**

イザヤ書において動詞**רשׁב**は、七回登場するが、それらはすべて40章以降に限定されている。そこで、これらの七つの用例のすべてについてそれぞれ検討した上で、イザヤ書における福音とはなにか、提示していきたい。

#### 40:9

高い山に登れ、シオンに知らせを伝える者よ (**מְבַשְׂרֵת**)。  
力の限り声をあげよ、エルサレムに知らせを伝える者よ (**מְבַשְׂרֵת**)。  
声をあげよ。恐れるな。  
ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」  
見よ。【神】である主は力をもって来られ、その腕は統べ治める。  
見よ。その報いは彼とともにあり、その報酬は彼の前にある。  
彼は羊飼いのように、その群れを飼い、  
その腕に子羊を引き寄せ、そのふところに抱き、  
乳を飲ませる羊を導く。(40:9-11、一部私訳)

40:9における「シオン」や「エルサレム」を呼格と理解し、「知らせを伝える者」が「シオン」であると考える訳もある(NRSV、ESV、CEBなど)。しかし、41:27や52:7から考えて、ここで「知らせを伝える者」は、その知らせを「シオン」や「エルサレム」に伝える存在であると理解するほうが適切である。つまり、

シオンに知らせを伝える者 → シオン/ユダの町々

という形で、知らせは伝えられる。

この箇所では、「見よ。あなたがたの神を」(40:9)という内容の知らせをシオンに対して語ることが命じられている。つまり、ユダの町々に(「あなたがた」は二人称男性複数<sup>8)</sup>)と密接な結びつきにある神が、シオンへと来られることに注目せよと、『知らせを伝える人』は聞き手であるシオンに命じている。さらに、主である神は、その同じ腕をもって、かたや力のうちに統治し、ふさわしい

---

8. 複数である**עַרְי יְהוּדָה**の**עַרְי**は女性名詞であるから、女性複数で受けるべきであるが、ここは男性複数で受けている。複数の町について語りつつも、同時にそこに住む人々に対して語りかけていることがわかる。

報いを与える (40:10) と同時に、羊飼いが羊を導くように、子羊や乳を飲ませるべき羊、すなわち弱者をも導く (40:11) 。この「主の腕」は相反するようなイメージであるが、両者共に「王」を表す比喩である<sup>9</sup>。つまり、「王である方、シオンの神である主が来られること」がここで告げられている。そして、これが「よい知らせ」の内容である。

#### 41:27

わたしが北から人を起こすと、彼は来て、  
日の出る所から、わたしの名を呼ぶ。  
彼は長官たちをしっくいのように踏む。  
陶器師が粘土を踏みつけるように。

だれか、初めから告げて、われわれにこのことを知るようにさせただろうか。  
だれか、あらかじめ、われわれに「それは正しい」と言うようにさせただろうか。  
告げた者はひとりもなく、聞かせた者もひとりもなく、  
あなたがたの言うことを聞いた者もだれひとり、いなかった。

わたしは、最初にシオンに、「見よ。これを見よ」と、  
エルサレムに、知らせを伝える者 (מְבַשֵּׂר) を与える<sup>10</sup>。 (41:25-27、一部私訳)

「わたし」、すなわち主が北から人を起こし、長官たちを踏み砕く、と語っている (41:25) 。ところが、このことを告げることができる存在がまったくない (41:26) 。そこで、この計画を語ることができる人、すなわち「知らせを伝える者」をシオン、すなわちエルサレムのために「わたし」、すなわち主が備える (41:27) 。ここでの知らせの内容は、「主が北から人を起こし、長官たちを踏み砕く」 (41:25) である。40:9との結びつきは明白である。「王である方、シオンの神である主が来られるのは、人を起こして、その人に長官たちを踏み砕かせるためである」。そして、40:9同様に、この内容は、主が立てた人を介してシオンに伝えられる。つまり、

9. Joseph Blenkinsopp, *Isaiah 40-55*, The Anchor Bible 19A (New York: Doubleday, 2002) 186-187.

10. 41:27は二行一句で二行がお互いに補い合い、一つのことを語り合っている。つまり、

הַיְהוָה הֵנָּה  
אֵתָּן                      רֵאשׁוֹן לְעִיּוֹן  
וְלִירוּשָׁלַם מְבַשֵּׂר

最初にシオンに「見よ。これを見よ」と  
(知らせを伝える者をわたしは与える)、  
(最初に) エルサレムに (「見よ。これを見よ」と)  
知らせを伝える者をわたしは与える。

となっており、下線部がそれぞれの行では省略されている。全体としては、「最初にシオン、すなわちエルサレムに、『見よ。これを見よ』と知らせを伝える者をわたしは与える」という意味である。

知らせを伝える者 → シオン

となる。内容もつながっているし、その伝達の方向も同じである。

## 52:7

山々の上にあつて、なんと美しいことよ、  
知らせを伝える者 (מְבַשֵּׂר) の足は。  
平和 (שְׁלוֹם) を告げ知らせ、  
よい知らせを伝え (מְבַשֵּׂר טוֹב) 、  
救い (יְשׁוּעָה) を告げ知らせ、  
「あなたの神が王となられた (מֶלֶךְ אֱלֹהֶיךָ)」とシオンに言う者の足は。

声。あなたの見張り人たちが声を上げた。  
彼らは共に喜び歌っている。  
彼らは、【主】がシオンに帰られる (בְּשׁוּב יְהוָה צִיּוֹן) のをまのあたりに見るからだ。

共に大声をあげて喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。  
【主】がその民を慰め (נָחַם) 、エルサレムを贖われた (גָּאַל) から。  
【主】はすべての国々の目の前に、その聖なる腕を晒した。  
地の果てすべても、私たちの神の救い (יְשׁוּעַת אֱלֹהֵינוּ) を見る。

(52:7-10、一部私訳)

52:7の語り手がだれであるかは明確ではない。その一方で、シオン (צִיּוֹן、女性名詞) が「あなた (女性単数) の神」と呼びかけられている。シオンに対して告げ知らされるべきことは、「平和」 (שְׁלוֹם) であり、「救い」 (יְשׁוּעָה) であり、「あなたの神が王となられた (王であることを明らかにされた)」 (מֶלֶךְ אֱלֹהֶיךָ) という知らせである。ナホム書1:15 (HB 2:1) でも、この平和の到来が告げ知らされ、さらに詩篇96:2では、「主の救い」が告げ知らせられている。「平和」も「救い」も重要であるが、「あなたの神が王となられた」というシオンの神の即位の知らせは、40:9における「見よ。あなたがたの神」という表現とのつながりを見いだすことができる点から最も中心的なよい知らせの内容であることがわかる。つまり、40:9ではシオンに住む民たちはシオンの神に注目するように招いたが、今まさにこの神が王となり、王としてのわぎをなされることが告げられている。シオンの神が王となられたことは、語り手の視点から言うならば、もうすでに現実となっていることである (מֶלֶךְは完了形)。つまり、「主が来られ、人を起こして、長官たちを打ち砕くこと」によって、ご自身が王であることを明らかにされる」という知らせがここでは伝えられている。そして、このことによって、救いがおこり、平和が到来したのだ。

52:8では、知らせを聞いたあとの応答が綴られている。ここでも、語り手はシオン (「あなた」) に向かって語りかけている。「知らせを伝える者」が到来し、その知らせを聞いたシオンの見張り人

たち（「彼ら」）がまず声を上げた（**וַיִּשְׁאוּ** [完了形]）。そして、それをきっかけに、この知らせに応答して、彼らは喜び歌い続ける（**וַיִּרְנְנוּ** [未完了形]）。ここまでは「声」、「歌う」など音、そして聴覚に焦点が当てられる。そのような音が生み出されるのは、見張り人たちが主のシオンへの帰還、すなわち王としての都への帰還を目で見ているからである（**וַיִּרְאוּ** [未完了]）。知らせとして耳で聞いていたものが、主のシオンへの帰還という形で目で見えて確認しつつある。まず耳で聞いて、次に目で見ているからこそ、喜びの音が継続して溢れている。主は王とはなられた。そして、今、都への帰還の途上にある。

52:9-10では、喜びと歌が見張り人たち（52:8）から広がる。次いでエルサレムの廃虚（女性複数）が喜び歌うように招かれている。52:8と同様に、前半（52:9）は音に関わることば（「大声」、「喜び歌う」）が繰り返され、それを受けて後半（52:10）は視覚に訴えることば（「目の前」、「見る」）が繰り返される。52:10の「私たち」がここでの語り手である。「私たち」とはだれだろうか。52:8の流れから考えると、シオンの「見張り人たち」が今度は、廃虚となったエルサレム、すなわちシオンに向かって語りはじめていると考えるのが自然だろう。つまり、

知らせを伝える者 → 見張り人たち → エルサレムの廃虚・シオン

の順で知らせが伝えられているのである。

主がその聖なる腕をさらした結果、見張り人たちの神（「私たちの神」）がもたらした救いを世界中が見るようになる。だからこそ、このよい知らせを聞いたエルサレムの廃虚は喜び歌うように招ねられている。さらに、主が王としてご自身を表されること、すなわち、来て、人を起こして長官たちを砕き、平和と救いをもたらすことは、主の民が主によって慰められ、都が贖われたことと深く関連している。

## 60:6

らくだの大群、ミデヤンとエファの若いらくだが、あなたのところに押し寄せる。

これらはみなシェバから来る。

金と乳香を携えて、【主】の栄誉を告げ知らせる（**וַיְבַשְׂרוּ**）。

ケダルの羊の群れもみな、あなたのところに集まり、

ネバヨテの雄羊は、あなたに仕える。

これらは受け入れられるいけにえとして、わたしの祭壇にささげられる。

わたしは、わたしの美しい家を輝かす。（60:6-7、一部私訳）

主の栄光があるエルサレム（60:2）に、エルサレムの子どもたちのみならず（60:4）、宝物であるらくだ、金や乳香、羊が、諸国より到着する。そして、そのような主へのささげものが「主の栄誉」を告げ知らせる。「主の栄誉」（**תְּהִלַּת יְהוָה**）だけでは、52章とのつながりは見えてこないが、都であるエルサレムに王である主が帰還し（52:8）、それゆえに王に謁見する為に世界中の人々が到来すると考えると、ここでの「告げ知らせる」ことも、「主が王となられた」と関連があることが示唆されよう。ただし、ここで綴られていることは、40:9、41:27、52:7での出来事と同時の出来事

ではなく、その後の出来事であると推量できる。

## 61:1

神である主の霊が、わたしの上にある。

貧しい者たちに知らせを伝えるため (לְבַשֵּׁר) 、【主】はわたしに油をそそいだ。

心の傷ついた者たちをいやすために、わたしを遣わされた。

捕らわれ人たちには解放を、囚人たちには釈放を告げ、

【主】の恵みの年とわれわれの神の復讐の日を告げ、

すべての悲しむ者たちを慰め、

シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、

憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。

彼らは、義の樅の木、栄光を現す【主】の植木と呼ばれる。(61:1-3、一部私訳)

直前の60章では、主が一人称で、「あなた」、すなわちエルサレム/シオンに向かって語りかけている。主はエルサレムの光となり、あらゆる繁栄がそこに運びこまれる。さらに、エルサレムの民は正しい者とされ、地を所有し、そこで主の栄光を表す(60:21)。「起きよ。光を放て」(60:1)の命令が実現するのである。

それに続く61章の冒頭で「わたし」が登場する。これは60章の「わたし」、主ではない。むしろ、60章での出来事をうけて、エルサレム/シオンが一人称で語りはじめるのだ。主の霊が注がれ、油が注がれ、任命され、遣わされる。その目的は「貧しい者たちに知らせを伝える」ためである。60章で語られている「光を放つ」わがが、ここでなされている。ここでは、

わたし (エルサレム/シオン) → 貧しい者たち

と知らせた伝えられる。ここで、知らせを伝える者が告げるのは、「解放」であり、「釈放」であり、「主の恵みの年とわれわれの神の復讐の日」の到来である(61:2)。この出来事も、「主が王となられた」こと、そしてそれによって適切な裁きが到来することと深く関わりがあるだろう。「すべての悲しむ者たち」(61:2)ともあるが、続く「シオンの悲しむ者たち」(61:3)から考えて、エルサレムに住む者たちこそ、知らせが伝えられる者たちの中核にある。そして、この知らせが届いたとき、エルサレムに住み者たちの間に喜びが生み出され、廃虚となったエルサレムに回復が訪れる。

## まとめ

イザヤ書に登場する動詞רָשַׁעがどのように用いられてきたかを検討してきた。そして、この動詞が一貫して、「知らせを告げる」動作を表していることは例証してきた。もちろん、「知らせを告げる」主体は、変化している(シオンへの伝達者 [40:9; 41:27; 52:7]、シェバからの人々 [60:6]、エルサレム/シオン [61:1])。「知らせを告げられる」対象も変わる(シオン [40:9; 41:27; 52:7]、諸国 [60:6]、エルサレムの民 [61:1])。しかし、知らせを聞いた者が、今度は伝える者となっていおり(「シオンへの伝達者」→「シオン」)、知らせは次々に広がっていく。

知らせの内容は、シオンと契約を結ばれた神（「あなたがたの神」 [40:9]、「わたし」 [41:27]、「あなたの神」 [52:7]、「主の栄誉」 [60:6]、「主の恵みの年とわれわれの神の復讐の日」 [61:2]）に関することである。特に、その神が王となられたこと（52:7）であり、その腕の力を人々の目の間にさらして（52:8）、王として統治し（40:10）、民を養い（40:11）、「北から人を起こし、長官たちを踏み砕」（41:25）き、平和と救いをもたらす（52:7）、民を慰め、エルサレムを贖う（52:9）ことである。この神は、やがてシオンに帰還される（52:8）。そして、シオンの人々のみならず（52:8）、諸国民がそのわざを見る（52:10）。

この知らせは、主のわざとそのシオンへの帰還への期待のゆえに、知らせを聞き、主の帰還がはじまったのを見た見張り人たちの間にまず喜びを生み出し（52:8-9）、続いて見張り人の知らせを聞いた者たちの間にも喜びが生まれる（52:9; 61:3）。それとともに、いやし、解放、釈放が現実となり、主による回復（「主の恵みの年」）と正しい裁き（「復讐」）がもたらされる（61:1-3）。

このようにまとめてみると、イザヤ書における福音、すなわち告げ知らされるべき知らせの内容は、第一義的にシオンと契約を結ばれた神に関するものであり、その神が王としてご自身を表されたことであることがわかる。しかし、シオンと契約を結ばれた神のわざは、今、すぐのこののみならず、人々が将来起こることを待ち望むわざも含まれている。そして、この知らせが告げられるところに、喜び、いやし、解放、釈放が実現されることがわかる。したがって、厳密に定義するならば、イザヤ書における福音とは、イスラエルの神とそのわざに関するしらせであって、その中核にはイスラエルの神が王として自らを顕したことがある。さらに「福音」という知らせが告げられたとき、それ聞いた者たちの間にさまざまなものが生み出される。

## 2. イザヤ書における「福音」

さきに、サムエル記ならびに列王記を検討することを通して、「福音」は、「何らかの形の紛争、多くの場合には戦場における戦闘が行われている中での、その勝敗の知らせ」（名詞）とその「知らせを伝えること」（動詞）を表していることを示してきた。それでは、この定義と、イザヤ書における「福音」、特に52:7-10で述べられている「福音」の間にはどのような関係があるのだろうか。さらに、イザヤ書全体の文脈を考えると、イザヤ書52:7-10で提示されている「福音」はどのようなものだろうか。

この課題を明らかにするために、イザヤ書52:7-10に登場す、幾つかの語に注目しつつ、イザヤ書の全体をさらに見渡していきたい。ここで注目する語は以下の五つである。「贖う」（גאל）、「慰める」（נחם）、「救う」（ישׁוּ）、「王」（מלך）、「平和」（שלום）。

### 12章

7章から12章にかけて、アッシリヤの侵攻による厳粛な審判、戦争の終結と来たるべき王の到来、シオンに住まわれる主によるアッシリヤへの裁き、残れるイスラエルの民の立ち返りとシオンへの帰還が描かれている。そのクライマックスが12:1-6の語りである。

その日、あなたは言う。

「【主】よ。感謝します。

私を怒られたのに、あなたの怒りは去り、  
あなたが私を慰めてくださいました (וְתַנְחֵמֵנִי) から。  
見よ。私の救いの神 (אֱלֹהֵי יְשׁוּעָתִי)。私は信頼し、恐れることはない。  
ヤハ、【主】が私の力、私のほめ歌、  
私のために救いとなられた (וַיְהִי־לִי לְיְשׁוּעָה) から。」  
あなたがたは喜びながら、救いの泉 (מַעְיַיִן הַיְשׁוּעָה) から水を汲む。

(12:1-3、一部私訳)

主の怒りが慰めへと変わったことがなによりもまず綴られている (12:1)。主の怒りは、一般的に、その国に対する厳粛な審判という形で表される (アッシリアに対しての主の怒りについては、10:25-26参照)。イスラエルに対する主の怒りがアッシリアの侵攻によって表された。しかし、その怒りが去り、主の慰めがイスラエルへと到来している。

ここでの「慰め」は具体的にはなんだろうか。11:11-16に描かれているように、諸国へと散らされた残りの者を主が集めること、エフライムとユダの和解、周辺諸国への戦いにおける勝利、出エジプト同様のアッシリアからの帰還である。このことと並行で起こっているのが、メシアの到来とその王国の確立である (11:1-9)。9:6-7との関連からも明らかにように、メシヤの到来もまた、イスラエルの神である主のわざである。そして、諸国には、ひとりのみごりごとによって「平和」がもたらされる (「平和の君」 [שֶׁר־שָׁלוֹם]、 「その平和は限りなく」 [וְלִשְׁלוֹם אֵין־קֶץ])。さらに、これら一連の出来事を、12:2-3では「救い」 (יְשׁוּעָה) と呼んでおり、これらのわざの主体が主であることは明確になっている。つまり、主の慰めと主の救いは、不可分な関係にある。

主の慰めを経験した者たち、つまり、喜びつつ、「救いの泉から水を汲」 (12:3) んだ者たちは、シオンに住む者に対して語りかけている。つまり、シオンに住む者に、主のわざを諸国の民に知らせ、全世界に知らせ、大声をあげて、喜び歌いなさい、と命じている (12:4-6)。つまり、

救いの泉から水を汲んだ者たち → シオンに住む者 → 全世界

という知らせの連携が描かれている。このように、主の慰めが到来したとき、すなわち主が周辺諸国に勝利し、散らされた者を集め、シオンへと連れ帰り、そこにメシアによる王国を確立し、平和が到来し、民のうちに喜びが生まれる。そして、民はこの主のわざを全世界に知らせるように命じられる。つまり、主のわざについての知らせが喜びを生み出し、その喜びは、主のわざというよい知らせを伝えるように押し出すのである。

なお、12:6に注目しておきたい。

シオンに住む者。大声をあげて、喜び歌え。

イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる、大いなる方。 (12:6)

ここでは、イスラエルの聖なる方がシオンにおられる、とはあるが、シオンに帰還する、とは述べられていない。ただ、最終的にはシオンに主はおられ、民もそこに共にいるのである。

このように見ると、52:7-10で告げ知らせられているのは、12:1-6で語られていたことの多くのことが実現したというしらせである。ただし、52:7-10ではまだ、主のシオンには帰還してはいない。しかし、平和が到来し、救いがシオンに告げ知らせられ、民は慰められ、その知らせを人々に伝えている。

## 24～27章

13章から23章において諸国に対する主の審判の預言が告げられたあと、24章から27章までは「イザヤの黙示録」とも呼ばれる、描写的に強調されたイメージに満ちたセクションが続く。ここでは、7～12章に見られるアッシリヤへの主の審判を一典型例とする、諸国への審判の姿が描かれている。

24:21-23では、主による宇宙大の戦いとその結末が描かれている。

その日、【主】は天では天の大軍を、  
地では地上の王たちを罰せられる。  
彼らは囚人が地下牢に集められるように集められ、  
牢獄に閉じ込められ、  
それから多くの年がたって後、罰せられる。  
月ははずかしめを受け、日も恥を見る。

万軍の【主】がシオンの山、エルサレムで王となり (מֶלֶךְ יְהוָה צְבָאוֹת) 、  
栄光がその長老たちの前に輝くからである。(24:21-23、一部私訳)

ここでは、天と地で同時に、そして並行して行われる戦いにおける主の勝利が予告されている。そして、その勝利の結果、イスラエルの神は、その王座のあるシオンの山において王として即位する。戦いにおける勝利とそれに続く王としての即位は、旧約聖書には典型的なパターンである。

24:21-23を見る時、福音についての二つの定義、「何らかの形の紛争、多くの場合には戦場における戦闘が行われている中での、その勝敗の知らせ」と「主が王としてご自身をあらわした/主が王となられた」ことの関係が明確になる。これら二つはイザヤ書においては同じことを指しているのだ。王となる/王であることが明らかになるのは、何らかの紛争において敵を完全に打ち破ることよってだからだ。したがって、「あなたの神が王となられた」(52:7)という知らせは、24:21-23の実現をも告げていると考えることは可能である。

より終末的な出来事がより絵画的に25:6-9に描かれている。

万軍の【主】はこの山の上で万民のために、  
あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、  
髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される。  
この山の上で、万民の上をおおっている顔おおいと、  
万国の上にかぶさっているおおいを取り除き、  
永久に死を滅ぼされる。  
神である主はすべての顔から涙をぬぐい、  
ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。

【主】が語られたのだ。

その日、人は言う。

「見よ。この方こそ、私たちが救いを待ち望んだ (קִיִּינוּ לְוַיִּשְׁעֵנוּ) 私たちの神。

この方こそ、私たちが待ち望んだ【主】。

その救いを (בְּיִשׁוּעָתוֹ) 楽しみ喜ぼう。」 (25:6-9、一部私訳)

語り手は、主に対して「私たちが救われる」 (וַיִּשְׁעֵנוּ) や「その救いを (בְּיִשׁוּעָתוֹ) . . . 喜ぼう」と述べている。ここでの「救い」とは、その直前に書かれている「山の上で万民のために」もたれる「宴会」へと招きであり (25:6)、「永久に死を滅ぼ」し、「涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる」 (25:8) ことである。この箇所での主の敵は「死」である。「死」に対する勝利を、52:7-10での「シオンへの帰還」とは同じものと考えすることはできない。しかし、24～27章のより高調された用語とイメージから考えて、「主がともにおられる山における民の状況」 (11:9参照) の一表現とも捉えることができる。

さらに、ここでは「救われる」 (וַיִּשְׁעֵנוּ) が未完形であることから考えて、主が王となられたあと、やがて来たるべき終末的な希望も25:6-9で告げられていると考えることが最も適切ではないだろうか。つまり、天の大軍や地の王たちを打ち破ることによって主は王となられたが、それはさらに強固な敵である死に対する勝利をも予感させ、期待させるものである。それゆえに、52:7-10の知らせは、25:9-12の終末的期待を期待させるものである。

26章から27章にかけて「平和」という語が三回、登場する。

志の堅固な者を、あなたは全き平安 (שָׁלוֹם | שָׁלוֹם) のうちに守られます。

その人があなたに信頼しているからです。 (26:3)

【主】よ。あなたは、私たちのために平和 (שָׁלוֹם) を備えておられます。

私たちのなすすべてのわざも、あなたが私たちのためにしてくださったのですから。

(26:12)

しかし、もし、わたしのとりでにたよりたければ、

わたしと和 (שָׁלוֹם) を結ぶがよい。和 (שָׁלוֹם) をわたしと結ぶがよい。

(27:5)

52:7で告げ知らされている「平和」は、主に信頼する者に対して与えられる「平和」である (26:3, 12) であるとともに、主が「美しいぶどう畑」 (27:2)、すなわちエルサレムとユダ (5:1-7参照) とも「平和」を結ばれたことを意味し (27:5)、ここでもやはり、26～27章で語られていることの少なくとも一部の実現が52:7-10で語られていることがわかる。

このように見ても、24～27章に描かれている、実に高調された回復の姿の少なくとも一部が実現したことが、52:7-10では告げられている。さらに52:7-10で語られていることの実現を通して、

終末的希望である死に対する勝利をも期待させることがわかる。

### 32～33章

32:15-20では、終末的な回復の幻が描かれている。「主の霊が・・・注がれ」（32:15）をきっかけに、「義は平和（שָׁלוֹם）をつくり出し」（32:17）、主の「民は、平和（שָׁלוֹם）な住まい、安全な家、いこいの場に住む」（32:18）ようになる。これは「正義によって治め」（32:1）る、ひとりの王の到来によって実現する。この知らせは、平和など見出すことのできない、恐ろしいことに満たされて国に到来する。

見よ。彼らの勇士はちまたで叫び、平和の使者たち（מְלָאכֵי שָׁלוֹם）は激しく泣く。  
大路は荒れ果て、道行く者はとだえ、  
契約は破られ、町々は捨てられ、人は顧みられない。  
国は喪に服し、しおれ、レバノンはずかしめを受けて、しなび、  
シャロンは荒地のようになり、バシャンもカルメルも葉を振り落とす。（33:7-9）

この直後、シオンの山が登場し、そこで、イスラエルは「美しい王」（מֶלֶךְ בְּיָפוֹ）を見る（33:17）。32:1に登場する王だろう。敵である諸国が去っていった姿も見る（33:18-19）。そして、もうひとりの王が登場する。

私たちの祝祭の都、シオンを見よ。  
あなたの目は、安らかな住まい、取り払われることのない天幕、エルサレムを見る。  
その鉄のくいはとこしえに抜かれず、その綱は一つも切られない。  
しかも、そこには威厳のある【主】が私たちとともにおられる。  
そこには多くの川があり、広々とした川がある。  
櫓をこぐ船もそこを通わず、大船もそこを通らない。  
【主】は私たちをさばく方、  
【主】は私たちの立法者、  
【主】は私たちの王（מֶלֶךְנוּ）、  
この方が私たちを救われる（יִשְׁעֵנוּ）からだ。（33:20-22、一部私訳）

ここで登場する王は、32:1に登場する人間の王ではなく、イスラエルの神である主のことである。王である主はシオンに着座する。そして、そこで民とともに住まれる（33:21）。戦いはもはやなく、人々は安らかに住むことができる（33:20）。ここで注目しておきたいのは、主が「『私たちの』王」と呼ばれている点である。シオンに住む者たちと特別な関係にある神である。特別な関係がある方、王である方が自分たちを救う。つまり、すでに存在している特別な関係に基づいて、主は救いを行われつつあるのだ。そして、主の王としての働きと人の王としての働きは、重なり合っている。王である主の熱心が、ダビデの子孫である王と通してそのわざをするのであろう。

52:7-10においても、33:20-22に描かれている主が、まもなくシオンに着座することが期待されて

いる。そして、主の「救い」は実現しつつも（52:7）、その到来のプロセスの中にもある（33:22における未完了形の「救われる」）ことが明らかにされる。つまり、主は王になられた。そして、王としてイスラエルを救われるわざをこれまでも行い、これからも行い続けるのである。

### 35章

神の栄光が荒野と砂漠に到来する。そして、手の弱った者、ひざがよろめく者、心騒ぐ者に対して、次のように語られる（35:4）。

強くあれ、恐れるな。

見よ、あなたがたの神を。

復讐が、神の報いが来る（יָבוֹא）。

神は来て（יָבוֹא）、あなたがたを救われる（וַיִּשְׁעֲכֶם）。

「救われる」と「来る」の両者が未完了形であることから、主のシオンへの帰還と救いの到来への期待が述べられていることがわかる。

主が復讐と救いとともに来られるとき、「目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく」（35:5）。6章で描かれているイスラエルに対する主の審判の時の終わりの到来である（6:9-10）。さらには、52:7-10に登場する、よい知らせを聞き、主の到来を見る人々の誕生も予見される。そして、民のシオンへの帰還がはじまる。

そこに大路があり、その道は聖なる道と呼ばれる。

汚れた者はそこを通れない。

これは、彼らのもの。

旅人も愚か者も、これに迷い込むことはない。

そこには獅子もおらず、猛獣もそこに上って来ず、

そこで出会うこともない。

贖われた者たち（גְּאוּלָּיִם）がそこを歩む。

【主】に贖われた者たち（פְּדוּיֵי יְהוָה）は帰る。

彼らは喜び歌いながらシオンに入り、

その頭にはとこしえの喜びをいただく。

楽しみと喜びがついて来、

悲しみと嘆きとは逃げ去る。（35:8-10、一部私訳）

同じ「贖われた者たち」と訳されている語は、二種類ある。ここでの議論と密接に結びつくのは、גְּאוּלָּיִםのほうである。「神に救われた者たち」（35:4）を、ここでは「贖われた者たち」と呼んでいる。並行に置かれているのが、「主に贖われた者たち」であることから、「あなたがたの神」（35:4）という契約関係の中にある主によってなされた、契約に忠実である主のわざが、この救いであり、贖いであることが示唆されよう。なお、興味深いことに、シオンへと帰還する彼らの特徴は、「喜び」である（35:10）。よい知らせを聞いた者たちと同じ反応を見ることができるといえ

ば、52:8-9)。

52:7-10を比較する時に、エルサレムの「贖い」は知らせの中に含まれているが(52:9)、「贖われた者たち」の帰還はまだである。主の帰還ははじまろうとしている(52:8)。

### 36～37章

アッシリヤ軍の進攻とエルサレム包囲に対して、主が戦われ、彼らを打ち破り、エルサレムを守った(37:36)ことが描かれている36章から37章にかけて、「救う」ということばが二回、登場する。まず、ヒゼキヤの主への祈りである。

私たちの神、【主】よ。今、私たちを彼の手から救ってください(הוֹשִׁיעֵנו)。そうすれば、地のすべての王国(כָּל־מַמְלָכוֹת הָאָרֶץ)は、あなただけが【主】であることを知りましょう。(37:20)

アッシリヤの侵攻からエルサレムが守られることをここでヒゼキヤは「救い」という語で表現している。ここでの「救い」はこれまで語られている「救い」と無関係ではない。確かに諸国、特にアッシリヤの侵攻からの救いである。さらに、歴史の時間的には逆であるが、39章では別の国、バビロンの王がエルサレムへと上ってきたと綴っている。しかし、その後に、これまで語られたような高調されたシオンの状況になっているとはいえない。したがって、ある意味で部分的である。

その一方で、ここで「地のすべての王国」(37:20)という表現が登場し、彼らがイスラエルの神が主であることを知るきっかけとなるという表現は注目に値する。諸国からの救いと主が王となることとの結びつきはこれまで述べてきたが、直接的に「主が王となられた」という表現はないにしても、諸「王」国がイスラエルの神を「主」と認め、結果として、「王として認める」ことが言下に示されている。

52:7-10の知らせは、この出来事と直接的に関わりはないと考える<sup>11</sup>。しかし、アッシリヤ軍からの救いという36～37章の出来事が、52:7-10の前味であると考えられることはできる。試練ではあったが、ヒゼキヤが期待する「平和と安全」(39:8)は最終的に保たれたからである。

1～39章を見てきたが、それぞれの箇所が独特な形で52:7-10に対して備えていることがわかる。まず、12:1-6を初めとする9～12章にかけての部分は、52:7-10で取り上げられている知らせの内容の予告、神のわざのシナリオである。その一方で、黙示的であり、より高調された描写に満ちている24～27章は、52:7-10の予告ではない。むしろ、52:7-10が起こった時、さらに期待できる内容に満ちている。ところが、33～34章は、もう一度、52:7-10の予告にもどる。ところが、35章以降は、40章以降の前味となる。35章は聞き手を招くスピーチとして(「強くあれ、恐れるな」[35:4]など)、40章以降の「招き」についての前味である。そして、36～37章は「平和と安全」の到来を物語ることによって、52:7-10で告げられている知らせで期待されていることは前味としてもうすでに

---

11. もちろん、密接に結びつくとも考える意見もある。たとえば、Matthew Seuferet, "Isaiah's Herald," *WTJ* 77 (2015): 219-35がある。

起こっていると伝えている。

つまり、52:7-10のよい知らせは、その概要がすでに予告されており（9～12章、33～34章）、規模は小さいにしても似たことがすでに起こっている（36～37章）。そして、そのよい知らせが告げられたならば、さらなる終末的な主のわざを人々は期待する（24～27章）。過去から将来へと人々を押し出し、確信にも近い期待を与えるのが、イザヤ書における福音である。

#### 40～48章

40章は次の神の語りかけをもってはじまる。

「慰めよ (וְנַחֲמֵנוּ)。慰めよ (וְנַחֲמֵנוּ)。わたしの民を」と  
あなたがたの神は仰せられる。（40:1）

ここで、イスラエルに対する慰めの到来が宣言されている。これは、12:1で宣言された慰めがはじめたことの宣言と理解できる。それは、主ご自身によるその民の慰めの始まりであり、エルサレムを贖うわざのはじまりである（52:9）。

ただし、12:1-6でクライマックスを迎える9章から12章に描かれているシナリオと大きな変化が一箇所存在する。それは、アッシリヤによるユダの破壊がとどめられ、バビロニアによるユダの破壊となった点である<sup>12</sup>。

その後、主は自らがイスラエルを贖う者である（「あなたを贖う者」 [וְגֹאֲלֶךָ]）と語っている（41:14）。そして、この「贖う」行動が現実となっている視点から、次のように語る。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、【主】はこう仰せられる。

イスラエルよ。あなたを形造った方、【主】はこう仰せられる。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ (וְגֹאֲלֵךָ)。

わたしはあなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのもの。

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、

川を渡るときも、あなたは押し流されない。

火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

わたしが、あなたの神、【主】、イスラエルの聖なる者、

あなたの救い主 (מוֹשִׁיעֶךָ) であるからだ。（43:1-3、一部私訳）

主による「贖い」は、主による命名と主の所有となることと密接に結びついている（43:1）。そして、それは主による「救い」とも無関係ではない（43:3）。主による諸国からの救出という形での「贖い」、そして結果として主の特別の所有となるという概念は、出エジプトにおけるパロからの救いと主の特別の所有となることと密接に結び合っている（出エジプト19:4-6、イザヤ51:10を参照）。

---

12. 12:1と40:1の関係については、Brevard S. Childs, Isaiah, The Old Testament Library (Louisville: Westminster John Knox, 2001) 297-298を見よ。

それでは、この「贖い」や「救い」は具体的にはどのようなものなのだろうか。イザヤ書43:10-13において、主は自らだけが「救い主」(מוֹשִׁיעַ)であって(43:11)、「告げ、救い(וְהוֹשִׁיעֵתִי)、聞かせた(וְהִשְׁמַעֵתִי)」神は、他には存在しないと主張している(43:12-13)。そして、次のように語る。

あなたがたを贖われた(גְּאֻלְכֶם) イスラエルの聖なる方、【主】はこう仰せられる。  
「あなたがたのために、わたしはバビロンに使いを送り(שְׁלַחְתִּי)、  
彼らの横木をみな突き落とす(וְהוֹרַדְתִּי)、カルデヤ人を喜び歌っている船から。  
わたしは【主】、あなたがたの聖なる者、  
イスラエルの創造者、あなたがたの王(מְלֻכְכֶם)である。」(43:14-15、一部私訳)

この語りは、ブックエンドの構造をしており、43:14では、「主・あなたがたを贖われた者・イスラエルの聖なる方」ではじまり、43:15では、「主・あなたがたの聖なる者・イスラエルの創造者・あなたがたの王」と終わっている。「主」と「聖なる方・者」は対となっていることから、「あなたがたを贖われた者」と「あなたがたの王」とは密接に結びついていることがわかる。このことは、続く、44:6の主の称号に明白となる。

イスラエルの王(מְלֻךְ־יִשְׂרָאֵל)である【主】、これを贖う方(גְּאֻלּוֹ)、万軍の【主】はこう仰せられる。(44:6)

さらに、43:14によりと王としてイスラエルを贖う者、主がバビロンに対して行動を起こす。すなわち、「使いを送り・・・彼らの横木を・・・突き落とす」(43:14)。「送り」(שְׁלַחְתִּי)と「突き落とす」(וְהוֹרַדְתִּי)と、完了形が二つ続いているが、これらは将来起こる出来事として理解すべきことである。しかし、語り手である主は、これらが起こることを了解しつつこのことばを語っている。

主の「贖い」の特徴が、44:21-23で明確とされる。

まず、主のイスラエルの贖いは、論理的にイスラエルの主への帰還に先立つ。

「ヤコブよ。これらのことを覚えよ。  
イスラエルよ。あなたはわたしのしもべ。わたしが、あなたを造り上げた。  
あなたは、わたし自身のしもべだ。  
イスラエルよ。あなたはわたしに忘れられることがない。  
わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、  
あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。  
わたしに帰れ。わたしは、あなたがたを贖った(גְּאֻלְתִּיךְ)からだ。」(44:21-22)

43:14で、贖いの行動は将来的なことであることを語った。それゆえに、「わたしに帰れ」という命令とその応答は、主の贖いの行動である、バビロンに対する行動よりも時間的には前に行われる可能性もある。時間的にはそうであったとしても、主の語りの視点から言うならば、また論理的には、主

がイスラエルを贖ったからこそ、主に帰れ、という意味がある。来たるべき確実な「贖い」の約束のゆえに、それが起こる前であったとしても、主に立ち帰ることこそ、論理的には正しいのだ。

二つ目に、主によるイスラエルの贖いは全被造物のよろこびの讚美を生み出す。

天よ。喜び歌え。【主】がこれを成し遂げられた (עָשָׂה) から。

地のどん底よ。喜び叫べ。

山々よ。喜びの歌声をあげよ。林とそのすべての木も。

【主】がヤコブを贖い (גָּאַל) 、

イスラエルのうちに、その栄光を現されるからだ。(44:23)

イスラエルに対してなされた主のわざが伝えられたとき、その知らせが告げられたとき、天や地のどん底や山々や林とそのすべての木は、喜び歌う。すでに述べた、福音が生み出す喜びと同じ原則をここに見ることができる。

45章から47章にかけて、「救う」 (יָשַׁע) の語根をもつ語が繰り返し登場する (45:8, 15, 17, 20, 21, 22; 46:7, 13; 47:13, 15)。ここで強調されているのは、主こそが「救い」の創造者であり、「救い主」であることと共に、それに対比して「救うこと」のできない偶像 (45:20; 46:7; 47:13) が描かれている。たとえば、

諸国からの逃亡者たちよ。集まって来て、共に近づけ。

木の偶像をになう者、救えもしない神 (אֱלֹהֵי לֹא יוֹשִׁיעַ) に祈る者らは、何も知らない。

告げよ。証拠を出せ。共に相談せよ。

だれが、これを昔から聞かせ、以前からこれを告げたのか。

わたし、【主】ではなかったか。

わたしのほかに神はいない。

正義の神、救い主、わたしをおいてほかにはいない。(45:20-21)

とある。このような徹底的な対比の真ん中で、「おとめバビロンの娘」 (47:1) に対して、主の復讐が告げられる (47:1-3)。そして、その語りの最後に、47:1-3の語り手である主について、次のような形で紹介される。

私たちが贖う方 (גֹּאֲלֵנוּ) 、その名は万軍の【主】、イスラエルの聖なる方。(47:4)

「救う」と「贖う」がこれまでも並行して用いられてきたが、ここでも「救う」神として、イスラエルの「贖い主」である主が紹介されている。

同様に、52:7-10で告げられている「平和」も主が造り出すものである。

わたしが【主】である。

ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。

あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。

それは、日の上の方からも、西からも、  
わたしのほかには、だれもいないことを、人々が知るためだ。  
わたしが【主】である。ほかにはいない。  
光を造り出し、やみを創造し、平和 (שָׁלוֹם) をつくり、わざわいを創造する者だ。  
わたしは【主】、これらすべてを造る者。(45:5-7)

「平和」をつくりだすことも、「救う」ことと同様に、主だけが神であることの証拠であると語られている。そして、主はこの「平和」をご自身が油を注いだ者 (מְשִׁיחוֹ) を用いてなされる。それは、ダビデの家に連なる王ではなく、ペルシア王クロスである。

【主】は、油そそがれた者 (מְשִׁיחוֹ) クロスに、こう仰せられた。  
「わたしは彼の右手を握り、彼の前に諸国を下らせ、  
王たちの腰の帯を解き、  
彼の前にとびらを開いて、その門を閉じさせないようにする。(45:1)

先に40:1と12:1を比較し、神の計画の変更について述べたが、ここでもその変更を見てとることができる。

48章で議論はひとまずのクライマックスに達する。48:17-19の語りにおいて、その語り手である主は「あなたを贖う [גְּאֹלְךָ] 【主】、イスラエルの聖なる方」(48:17)として紹介されている。そして、主の命令に耳を注意を向けさせれば、「あなたの平和」(שָׁלוֹמְךָ、新改訳は「あなたのしあわせ」と訳している)が川のようになる、告げられる(48:18)。そして、イスラエルの父祖たちに対する主の約束と似たことばでイスラエルに語りかけている。

あなたの子孫は砂のように (כְּחֹל זָרְעֶךָ)、  
あなたの身から出る者は、真砂のようになるであろうに。  
その名はわたしの前から断たれることも、滅ぼされることもないであろうに。(48:19)

「あなたの子孫は砂のように」という表現は、アブラハムへの主の語りかけ(創世記22:17)に登場すると共に、ヤコブが主に迫って語ったことばでもある(32:13)。「贖う」という語とアブラハムとの約束の組み合わせから考えて、イザヤ書で語られている主の「贖い」の行動、つまり「救い」は、時を遡ればアブラハムとの契約に戻るものであることが示唆される。その契約に基づいて、主が行動したのである。

そして、イザヤ書48:20は「告げ知らせる」ことの命令である。

バビロンから出よ。カルデヤからののがれよ。  
喜びの歌声をあげて、これを告げ、聞かせよ (הַגִּידוּ הַשְּׂמִיעוּ)。  
地の果てにまで響き渡らせよ。  
「【主】が、そのしもべヤコブを贖われた (גְּאֹל יְהוָה)」と言え。(48:20、一部私訳)

主が贖われたことを「告げ、聞かせる」ように命じられている。ちなみに、**הַשְּׁמִיעַי**同様のHiphil語幹の**שָׁמַעַי**は、52:7でも二回使われている。興味深いことに、43:12では、主自らが、自分だけが「告げ、救い、聞かせた」(**אָנֹכִי הִגַּדְתִּי וְהוֹשַׁעְתִּי וְהַשְּׁמִיעַי**)とある。最初に「聞かせた」の主であり、次に、48:20でヤコブに「聞かせよ」と命じられている。「知らせを伝える者」のアーキタイプは、主ご自身である。さらに、知らせを聞いたところから生まれた「喜びの歌声」と共に、この知らせを「聞かせる」ように勧められている。つまり、主が告げ知らせ、それゆえに喜びが与えられた者が、その喜びのゆえに次に告げ知らせるのだ。つまり、

主 → ヤコブ → 地の果て

というよい知らせの連鎖が起こる。そして、ヤコブが主の声に注意深く耳を傾けることがこの連鎖の条件であり(48:18)、喜びがこの連鎖の原動力である。これと同様の連鎖を12:1-6と52:7-10に見られる点は、興味深い。

それでは、40~48章と52:7-10で語られているしらせについて、まとめておこう。

よい知らせの内容である神のわざは確かにはじまっていると、40章から論じられている。まず、主がご自分の民を慰めはじめることを宣言されている(40:1-2)。そして、主の視点から言うならば、主はその民を贖っている(43:1; 44:22-23)。さらには、平和を造り出すのも主であるが(45:7)、それは主が油注いだ異邦人の王クロスによってである(45:1)。平和を造り出すこと自体は替わらないが、そのための手段として、主はダビデの家の王ではなく、ペルシア王を用いられた。計画の一部は変更されたが、進むべきゴールである「平和の創造」は変わっていない。そして、これら一連の出来事は、偶像ではなく主がイスラエルを救うことができる方であることを示している(45:20-21)。さらに、主の慰め、贖い、救いのわざは、創世記22章に登場するアブラハムに対する主の約束に基づくものである(イザヤ48:19)。さらに、主がなされるこれらのよい知らせを主から聞いたヤコブは、当然のこととして地の果てまで、それを告げ知らせるように命じられている(48:20)。

捕囚下にある民を激励するとともに、彼らが主から告げられている「よい知らせ」がどこから始まり(アブラハムとの契約)、だれによってなされ(イスラエルの神である主がクロスを用いて)、何かなされ(慰め、贖い、救い、平和の創造)、いつなされ(主の視点からはそれはすでに完了している)、その結果、なにをするように求められているのか(世界へと告げ知らせる)、これらのことが40~48章では見事にまとめられている。

#### 49~55章

49章がはじまると、主のしもべイスラエルは、世界中に主の救いを告げ知らせるように命じられている。

主は仰せられる。

「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、

ヤコブの諸部族を立たせ、

イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。

わたしはあなたを諸国の民の光とし、  
地の果てにまでわたしの救い (יְשׁוּעָתִי) をもたらす者とする。」 (49:6)

「地の果てにまでわたしの救いをもたらす」とはどのようなことか、いくつかの解釈の可能性があるが、48:20を受けていると考える時、この中に「地の果てにまで主の救いを告げ知らせる」働きが少なくとも含まれていると考えることができよう。

44:23と関連が深い表現が、49:13に登場する。

天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。  
山々よ。喜びの歌声をあげよ。  
【主】がご自分の民を慰め (נַחֵם) 、  
その悩める者をあわれまれる (יְרַחֵם) からだ。 (49:13)

44:23では、主がわざを成し遂げ、ヤコブを「贖った」から、天と地とその中に満ちるものたちが賛美するように勧められていた。ここでは、「慰め」(完了形)、「あわれみを表しつつけている」(未完了)からこそ、喜び歌う勧めが天地に語られている。つまり、「慰め」と「贖い」とが不可分の関係にあり、その事実は、被造物の喜びの動機である。

主の「救い」のわざに、何らかの戦いの要素が含まれていることは次の箇所から示唆される。

まことに、【主】はこう仰せられる。  
「勇士のとりこは取り戻され (יִקָּח) 、  
横暴な者に奪われた物も奪い返される (יִמָּלֵט) 。  
あなたの争う者とわたしは争い、  
あなたの子らをこのわたしが救う (אוֹשִׁיעַ) 。  
わたしは、あなたをしいたげる者に、彼ら自身の肉を食らわせる。  
彼らは甘いぶどう酒に酔うように、自分自身の血に酔う。  
すべての者が、わたしが【主】、あなたの救い主 (מוֹשִׁיעַ) 、あなたの贖い主 (גֹּאֲלֶךָ) 、  
ヤコブの力強き者であることを知る。」 (49:25-26)

「取り戻され」「奪い返され」と受動態が続き、その後、「わたし」が主語となっている。焦点が奪還されるものから、奪還する存在へと移り、最終的には「すべての者」が主を知ることに至る。このテキストを見る限りにおいて、救い主、そして贖い主である主がイスラエルの替わりに戦い、勝利を得て、あらゆるものを奪い返すことがわかる。ここでも焦点は、世界へと伝えられる点にある（「すべての者が」 [49:26] ）。

51章に入り、「慰める」という語が、頻繁に繰り返される (51:3 [2x], 12, 19) 。

義を追い求める者、【主】を尋ね求める者よ。わたしに聞け。  
あなたがたの切り出された岩、掘り出された穴を見よ。  
あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラのことを考えてみよ。

わたしが彼ひとりを呼び出し、彼を祝福し、彼の子孫をふやしたことを。

【主】がシオンを慰め (נְחַם) 、そのすべての廃墟を慰めて (נְחַם) 、  
その荒野をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにすることを。  
そこには楽しみと喜び、感謝と歌声とがある。(51:1-3、一部私訳)

48:19がそうであったが、ここでも廃墟となったシオンに対する主の慰めのわがが、アブラハムとサラのことと関連付けて語られている。つまり、主のあらゆるわがの背景には、アブラハムとの契約があり、それに対する主の忠実さ(特に「贖う」に表される)があるのだ。さらに、その主の慰めのわがから生まれるのが、「楽しみと喜び、感謝と歌声」(51:3)である。

人や天地も時間の経過に従って古びていく一方で、主の「救い」の永続性が強調されたあと(51:6, 8)、主の腕に焦点が移る(51:9-10、40:10-11; 51:5参照)。

さめよ。さめよ。力をまとえ。【主】の御腕よ。

さめよ。昔の日、いにしえの代のように。

ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。

海と大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、

贖われた人々 (גְּאוּלִּים) を通らせたのは、あなたではないか。

【主】に贖われた者たち (פְּדוּיֵי יְהוָה) は帰って来る。

彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭にはとこしえの喜びをいただく。

楽しみと喜びがついて来、悲しみと嘆きとは逃げ去る。(51:9-11)

エジプトから主が救い出した者たちは「贖われた人々」(גְּאוּלִּים)と呼ばれ(51:10)、バビロンから帰還する人たちは「主に贖われた者たち」(פְּדוּיֵי יְהוָה)と呼ばれている(51:11)。そして、彼らのシオンへの帰還は、喜びのうちに実現している(51:11)。このことを受けて主はもう一度、自らのみが慰める方であり、他のなにものかを恐れることはない。「わたし、このわたしが、あなたがたを慰める (מְנַחֵםְכֶּם)」という強調された表現で語る(51:12)。

三箇所目の慰めは、主からの憤りの杯を飲み干したエルサレムに向かって語られている(51:17-23)。「滅亡と破滅、ききんと剣」が訪れたエルサレムに対して、主は「わたしはどのようにしてあなたがたを慰めようか (אֵינְחַמְךָ)」と語っている(51:19)。ここでは未完形が用いられており、廃墟と化したエルサレムの現場の視点から、来たるべき慰めを主は自問しているのだ。それに続いて、主の慰めの具体的な現れとして、「杯を取り上げ」(51:22)、この杯をエルサレムを「悩ます者たちの手に渡」す(51:23)と語っている。

そして、ついにシオンに対して語りかけられる(52:1-6)。そして、シオンに今まさに来ようとする出来事を次のように述べる。

まことに【主】はこう仰せられる。

「あなたがたは、ただで売られた。

だから、金を払わずに贖われる (תִּגְאָלוּ) 。」(52:3、一部私訳)

この直後に、エジプトでの寄留、そしてアッシリヤによる苦しみが述べられている (52:4) 。そして、主は「今、ここで、わたしは何をしよう」 (52:3) と続ける。これまでの出来事を振り返りつつ、目前に迫るバビロンの破滅を見通して、そのときに起こる「贖い」が述べられている。52:3の **תְּגַאֲלוּ** は未完了形が用いられており、今来ようとしている主の贖いのわざの切迫感が十分に感じられる。

そして、これまでの議論をすべてうけて、シオンに向かって「あなたの神が王となられた」と語るものの足の祝福が述べられるのである (52:7-10) 。この知らせを聞いた者たちに、「去れよ。去れよ。そこから出よ」 (52:11) と語り、前を進み、しんがりとなられる主のゆえにバビロンから旅立つことが勧められる (52:11-12) 。そして、彼らのシオンへの帰還と伴って、主もシオンに戻られるのである。

去れよ。去れよ。そこを出よ。

汚れたものに触れてはならない。

その中から出て、身をきよめよ。【主】の器をになう者たち。

あなたがたは、あわてて出なくてもよい。逃げるようにして去らなくてもよい。

【主】があなたがたの前に進み、

イスラエルの神が、あなたがたのしんがりとなられるからだ。 (52:11-12)

52:7-10で「シオンの見張り人」が見る主の帰還とは、主の民と共にエルサレムに戻る主の帰還である。

52:13-53:12の苦難のしもべの歌は、諸国民へと平和をもたらすのが、実は主のしもべの苦難であることが語られる。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、

私たちの咎のために砕かれた。

彼への懲らしめが私たちに平和 (**שְׁלוֹמֵנוּ**) をもたらし、

彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。 (53:5、一部私訳)

1～39章では、「平和」は主の熱心によって生み出される王が生み出し (9:5-6) 、主自身が生み出すものであった (26:3, 12) 。45:5-7では、主が平和を生み出すことが告げられている。そして、ここでは「主のしもべ」が平和をもたらしている。

54章は、「喜び歌え」との命令をもってはじめられる (54:1) 。主は「あなたの贖い主」 (**גֹּאֲלֶךָ**) と呼ばれており、ここではシオンとの関係の強調が繰り返されている (54:5, 8) 。主がシオンのためにそのわざをはじめられたのだ。事実、動かされることのない「わたしの平和の契約」 (**בְּרִית שְׁלוֹמִי**) は確かに守られ (54:10) 、シオンの子どもたちの間に「豊かな平和」 (**רַב שְׁלוֹם**) が生まれる (54:13) 。主は確かによい知らせを語られた。それゆえに、主の慰め、救い、贖いは実現していく (55:10-11) 。民は、「平和のうちに」 (**בְּשְׁלוֹם**) 導かれて、シオンへと帰還する (55:12) 。主とともにシオンに帰還する民の間にまず平和が生まれるのである。

40～55章で課題としてひとつ残るのは、平和をもたらす王はどうなったのか、という点である。

45:1において、主は平和をご自身の油注がれた者であるペルシア王クロスを用いて行う、と語られた。さらに、その平和が「苦難の主のしもべ」を通してもたらされたことが示唆されている(53:5)。つまり、ダビデの家の王の使命は、まず主が油を注いだ異邦人の王を通してはじめられ、苦しみ、そしてついにはシオンに主とともに帰還する民によってもたらされ、今後はこの民を通して遂行される。「ひとりのダビデの家からでる王」という油注がれた者による者を通しての働きが、民主化されることになったのである。このことは、以下のテキストに明確に表されている。

耳を傾け、わたしのところに出て来い。

聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。

わたしはあなたがたととしえの契約 (בְּרִית עוֹלָם) 、  
ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。

見よ。わたしは彼を諸国の民への証人とし、  
諸国の民の君主とし、司令官とした。

見よ。あなたの知らない国民をあなたが呼び寄せると、  
あなたを知らなかった国民が、あなたのところに走って来る。

これは、あなたの神、【主】のため、

また、あなたを輝かせたイスラエルの聖なる方のためである。(55:3-5)

主がともにシオンに帰還される民が、9:5-6に登場する王の使命を継承したのである。このようにして、苦難のしもべ(たち)は王となる。主は王である苦難のしもべ(たち)を通して、シオンに、そして諸国へと平和をもたらすのである。

このように見ていくと、49~55章では、52:7-10に向かって40~48章で語られたことがまとめられた上で、シオンへの帰還に進むように命じられている。

主の慰めと贖いが出エジプトとバビロンからの帰還と結び付けられつつ(51:10-11)、そのような主のわががまもなくエルサレムの上に到来することが告げられている(51:12)。エジプトでの寄留とアッシリヤによる苦しみを踏まえた、バビロンからの帰還である(52:3)。主は、イスラエルの父祖であるアブラハムとの契約に基づいて、これらのことをなされる(51:1-3)。そして、帰還する者たちは、喜びつつシオンに戻る(51:3, 11)。その一方で、主のしもべが主の救いを地の果てまでもたらすもの(49:6、48:20参照)として任命をうける。そして、主の救いのわがの結果、主がどのようなかたであるかをすべての者が知るようになる(49:26)。なお、アブラハムとの契約に基づく主のわがは、喜びとシオンへの帰還を生み出す一方、それを経験した者たちには、この主のわがを地の果てで伝え、すべての者がこれを知るようになる働きが主から与えられる。

52:7-10でこのシオンとエルサレムの廃虚に主の慰めと贖いが伝えられる。それと同時に、主のしもべたちは立ち上がってシオンへと帰還するように招かれる。彼らは主とともにシオンへと戻るのだ(52:11-12)。このことを通して、シオンは、自分の民と主の帰還を同時に見る。そして、ダビデとの契約の継承者として、諸国の民への証人となるのだ(55:3-5)。この証言を聞いた諸国の民は、主の民こそが自分たちのために苦しんだ主の「しもべ」(52:13)、「主の御腕」(53:1)であることに気づき、驚くのである。

## 56～66章

40～55章でかたられたことは実現したのだろうか。完了形を用いて、主の視点からは実現していることとして理解されていた「慰め」と「救い」は民の中でもほんとうに現実となったのだろうか。56～66章に進むと、「慰め」と「救い」が人々の視点から描かれ、その結果、多くの場合、未完了形を用いて語られる。

「救い」の到来がまだであることを表現している箇所を上げてみよう。

わたしの救い (יְשׁוּעָתִי) が来るのは近く、わたしの義が現れるのも近いからだ。(56:1)

公義を待ち望むが、それはなく、  
救いを (לְיְשׁוּעָה) 待ち望むが、それは私たちから遠く離れている。(59:11)

「救い」の到来がまだである原因は、イスラエルの罪である。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、  
あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。(59:2)

そこで、主は自らの腕をもって「救い」をもたらされた(59:16)。ここで主が救いをもたらす情景は、戦場での戦いに比されている。

主は義をよろいのように着、  
救いのかぶとを頭にかぶり、  
復讐 (נִקְמָה) の衣を身にまとい、  
ねたみを外套として身をおおわれた。  
主は彼らのしうちに応じて報い、  
その仇には憤りを報い、その敵には報復をし、鳥々にも報復をする。(59:17-18)

そして、シオンへと「贖う者」 (גֹּאֲלָהּ) として行かれる(59:20)。

主がシオンに来られるからこそ、シオンは光を放つように命じられる。その光で諸国と諸王を照らすためである(60:1-3)。このことが実現する時、諸国はシオンに貢ぎ物をもって集まり、聖所は美しくなる(60:4-13)。主のシオンへの到来とそれによってシオンが「喜びの町」に帰られることを通して(60:16)、主こそがシオンを「救う」 (מוֹשִׁיעַ) 主、シオンを贖う (גֹּאֲלָהּ) ヤコブの全能者であることを知る(60:16)ようになる。

このような議論を受けて、「知らせを語る者」が、シオンに向かって、「解放」、「釈放」、「主の恵みの年と、われわれの神の復讐 (נִקְמָה) の日」を告げる(61:1-3)。シオンは、主が自らに「救い」 (יְשׁוּעָה) の衣を着せ、正義の外套をまとわせ(61:10) てくれるのを喜びつつ、待ち望むのだ。

知らせを伝える者は、シオンに救いが到来するまで沈黙をすることはなく(62:1)。主も、シオンの娘に向かって「あなたの救い」 (יְשׁוּעָתֵךְ) が来る」と語るように世界中に命じている(62:11)。まだ到来していない救いへの期待が繰り返される。そして、ついに主が救い主として来られる(63:1、

5)。

63:7-64:12は、主の救いの到来を求める祈りであり、そこでも過去の主の救いのわざが語られ (63:8, 9)、その「贖い」のわざも想起されている (63:9, 16)。特に63:9では、「贖い」と「救い」が並行して並べられている。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、  
ご自身の使いが彼らを救った (הוֹשִׁיעַם)。  
その愛とあわれみによって主は彼らを贖い (גָּאַלָם)、  
昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。(63:9)

ここでもイスラエルの背きが原因となって、イスラエル自身が主と敵対関係の中に入ってしまったことが綴られている (63:10)。だからこそ、主が帰って来られることを願うのである (65:17)。

この祈りを受けて、65章以降、主の救いのわざが到来することが語られる。そして、それは、12章、40章、そして52章でも語られた、主の慰めのわざである。

母が慰める者 (תְּנַחֲמֵנִי) のように、  
わたしはあなたがたを慰め (אֲנַחֲמְכֶם)、  
エルサレムであなたがたは慰められる (תְּנַחֲמֶנּוּ)。(66:13、一部私訳)

40～55章を受け、52:7-10のしらせに応答して、民はシオンへと帰還したことは確かである。しかし、56～66章を見ると、最終的な主の帰還と、最終的な主の慰めは、まだ到来していない。つまり、よいしらせが語られたとしても、語られた時点ですべて実現するわけではない。だからこそ、民は、56～66章において、慰めと救いの到来の遅れに対して不満を抱いているのである。

この問題についての議論は、イザヤ書における「よい知らせ」について考えるこの論文の範囲を越えているので、ここでは省略する。しかし、これまでの議論を振り返る時、ダビデへの契約を引き受けた民がそれに適切に応答したのか、についての課題 (55:3-5)、終末論的な期待の実現の課題 (24～27章) があるのではないだろうか。

### 3. まとめ

イザヤ書全体を52:7-10を鍵として、駆け足で検討してきた。そして、イザヤ書における「よい知らせ」とはなにか、考えてきた。以下、それをまとめておこう。

- (1) イザヤ書52:7-10における「よい知らせ」の背景には、主がアブラハムおよびダビデと結んだ契約がある。契約関係にある「あなたの神」として主は行動されている。
- (2) イザヤ書52:7-10における「よい知らせ」の内容は、契約関係にある神が、特に油注がれた者クロス王を用いて、慰め、贖い、救い、平和の創造をなし、民とともにシオンに帰り、自らが王であって、他にそのような存在は存在しないことを世界中に明らかにすることである。なお、「よい知らせ」の内容は、すでに事前に予告されているが、その細部において、予告され

ていることに変更が加えられている（たとえば、アッシリアではなくバビロンからの解放、ダビデの家の王ではなくその契約を継承した民とペルシア王クロスによる平和の創造）

- (3) イザヤ書52:7-10における「よい知らせ」が生み出すものは、喜びである。そして、この喜びは、よい知らせを聞いた者が他の人へと伝えるように押し出し、遂には、よい知らせがシオン、イスラエル、そして地の果てへと広がっていく。
- (4) イザヤ書52:7-10における「よい知らせ」の確かさを証言する出来事はもうすでに起こっている（36～37章）。
- (5) イザヤ書52:7-10における「よい知らせ」は、24～27章で描かれている終末論的な幻の実現の期待を人々の間に生み出す。その一方で、最終的な慰めの到来は期待しているようには起こらないのも事実であるが（56～66章）、王である主はそれを起こすと約束しつづける。